

小学校教員・保育者養成における 音楽教育改善のための基礎的研究（1）

— 大学1年生への音楽教育経験に関する質問調査をもとに —

Basic Research for Improving Music Education

In Elementary school and Nursery Teacher Training (1)

— Based on a music experience survey for first-year college students —

緒 方 満・大 西 潤 一¹

OGATA Mitsuru and OHNISHI Junichi

キーワード：音楽教育・小学校教員養成・保育者養成・音楽能力の自己評価

1 小学校教員・保育者養成における音楽教育改善の重要性

(1) 小学校教員・保育者に必要な音楽教育実践スキル

小学校教員・幼稚園教員・保育士には、音楽教育や音楽による保育実践を自在にできるスキルが求められる。初等教育・保育において、音楽学習や音楽表現活動は重要である。例えば、小さい子どもたちにとって、先生が教えてくれる、聴かせてくれる歌唱・演奏や音楽は、健やかな心と体の成長にとって欠かせないものである。また、幼児期・児童期に施される音楽教育は、子どもの将来の音楽的成長に決定的な影響を与える。さらに加えて、小学校教員・幼稚園教員・保育士をめざす者には音楽教育実践スキルの習得が必要な就職する上での理由がある。それは、小学校教員・幼稚園教員・保育士採用試験等において音楽実技能力や音楽知識に関するテストが実施されることが多いことである。つまり、小学校教員や保育士をめざす者にとって、「音楽実技ができない」、「音楽に関する知識がない」ではすまない、という状況にあることは明白である。

さて、小学校教員に必要な音楽教育実践スキルのほとんどは、音楽科授業の遂行に必要な不可欠なスキルである。新任として赴任し定年に至るまでの数十年に及ぶ教職従事者としての職責を全うでき得るために必要な数多くの教職に関するスキルの1つである。それは、子どもの音楽学習・音楽活動を、指導できる能力・企画運営できる能力・評価できる能力などである。これらの能力を身につけるには、義務教育で学習する音楽科の内容は完全に習得済みであることに加え、大学で学ぶ初等音楽教育に関する専門的な音楽学習内容も十分に習得する必要がある。また、保育者に必要な音楽教育実践スキルのほとんどは、乳児・幼児による音楽活動や音楽を活用した保育の遂行に必要な不可欠なスキルである。乳児や幼児に関わる保育者として従事する者は、このスキルを身につけていることが必須である。それは、ある意味小学校教員に求められる音楽能力以上に、多様性、即興性、エンターテインメント性、臨機応変な対応力が重要となる。

(2) 小学校教員・保育者養成における音楽教育の困難性

小学校教員・保育者養成で行われる専門的音楽教育は、義務教育段階で習得しておくべき音楽能

¹ 広島県立国泰寺高等学校

力が十分に備わっていることが前提として進められている。授業開始時期には、これまでの学校教育で学習した内容の復習をすることが多いであろうが、決められた教育課程を進めるうえでは十分な時間を割くことは難しい。そのような状況にもかかわらず養成段階における学習内容は、学生が将来子どもへの音楽指導を実践できることを可能にするレベルであるため、かなり高度なものになる。例えば、「両手で弾きながら、歌いながら、適切に教えながら」の伴奏法を中心とする鍵盤楽器奏法を身につけるために、一定期間の集中的なトレーニングが必要になる。さらに子どもたちのニーズに応じた適切な移調ができたり、子ども用に楽曲をアレンジできたり、子どもの音楽学習を望ましい方向に導くことができたりするようになることが必要で、この習得を目的としたいいくつかの講義・演習を受けることになる。当然、それなりの時間を費やして、学習や練習に専念することが欠かせないし、かなりの精神力・集中力・忍耐力ももち合わせなければ、子どもたちに対して望ましい音楽指導を提供できるようになるまでの音楽教育実践スキルレベルを身につけることはできない。

ところで、小学校教員・保育者養成における音楽教育の困難性の要因の1つは、義務教段階で習得しておくべき音楽能力、つまり音楽科教育の成果としての音楽科学力が低いことに起因するのではないかと筆者らは推測している。

あるとき、将来小学校教師をめざす優秀な学生が、「楽譜がまったく読めない」という悩みをうち明けたことがある。小学校教諭の免許を手に入れるためには、鍵盤楽器演奏スキル等の音楽に関する授業を受けてその単位を取得することが必須である。ピアノ初心者であり楽譜も読めない彼にとって、そのことは大きな重圧になっているとのことであった。実際、楽譜に示された音符から音高を解釈する機能が欠けているピアノ初心者は、打鍵時における音高誤りが改善されないという研究報告もある（山本・森田・三浦 2008）。

ここで、義務教育段階における音楽科学力の状況がわかる2つの報告を引用する。吉富ら（2008）は、347名の中学1年生を対象とした音楽能力の実態調査を行い、一般的な中学1年生、すなわち音楽科授業を唯一の音楽学習機会とする中学1年生の階名で聴唱・視唱できる能力、および歌詞を付けて視唱できる能力、が非常に低いことを明らかにした。吉富らは、「一般的な中学1年生が小学校学習指導要領に示された水準を悲惨な状況で達成していなかった」と言及している。次に中学校における音楽科授業の状況について、小川（2008）は「一般の公立中学校においては、教科書に掲載されている楽譜を正確に演奏できる生徒の数はきわめて限られており、教師は合唱指導や器楽指導において、譜読みや音取り等のアンサンブル以前の指導をすることを年中余儀なくされている。[緒方による中略] 読譜、視唱ができない状態で中学生の合唱をまとめあげることは新任の教師にとっては至難の業といえる」と指摘している。我が国の音楽科教育は中学校においてその完成を見るわけであるが、このような困難な状況をみる限り、前途は多難であると言える。

2つの報告は10年前のものであるが、現在も大きな変化は望めないと考えてよい。一般的な小学校教員・保育者志望学生、つまり義務教育における音楽科教育が主な音楽学習機会であった学生の音楽科学力はかなり低められたままにあると考えてよい。さらに、近年は音楽の習い事経験者も減少している。また、保育者養成大学の入学試験で音楽実技試験を廃止する大学も多いというのが現実である。先述した学生の「読譜力が低い」という苦悩は、同時に「読譜力が低い」学生にどのようにより高度の専門的音楽教育を実践していくのかという養成に関わる音楽教師たちの苦悩でもある。そして、この苦悩は多くの養成機関で深刻化していると考えられる。

(3) 小学校教員・保育者養成における音楽教育改善の重要性

上記のような音楽教育上の問題が存在していても、小学校教員・保育者養成で行われる専門的音楽教育が初等教育・保育に貢献することは重要な任務であること、つまり子どもたちに豊かな音楽教育環境を提供することが求められていること、に何ら変わりはない。音楽教育は教育・保育に関する社会のニーズや期待に十分に答えていかねばならない。

もし筆者らの推測どおりだとすれば、今後、子どもたちへの音楽教育の質を維持・向上させていくには、小学校教員・保育者養成における音楽教育を改善することが非常に重要になる。では何をどのように改善するのか、つまり教員・保育者養成における望ましい音楽教育プログラム開発はどうあるべきか。その解決に向けて、まずは現在の学生の音楽能力や音楽環境の状況を把握する基礎調査から始められねばならない、と考えられる。

2 大学1年生への音楽教育経験に関する質問調査

(1) 調査の概要

i) 調査の目的

本調査の目的は、小学校教員・保育者志望大学1年生個々の音楽経験の諸相を調査し、調査結果の分析・検討から、小学校教員・保育者養成における音楽教育プログラム開発に有益な知見を得ることであった。

ii) 調査の対象者

広島市内小学校教員・保育者養成系大学1年生 51名（1組27名 2組24名）

iii) 調査の期日・場所・方法

2021年11月8日（月）：広島市内H大学音楽教室

グーグルフォームによるリモートで、1年1組27名は14時40分から、1年2組24名は16時10分から実施した。

iv) 質問項目

質問項目は、基本情報項目、音楽能力の自己評価の項目、小学校・中学校・高校で受けた音楽教育の項目、小中高校での課外活動経験や音楽の習い事（お稽古事）の項目、家庭での音楽環境に関する項目、および日常の中での音楽活動に関する項目であった。なお、本小論では音楽能力の自己評価の項目、小学校・中学校・高校で受けた音楽教育の項目、小中高校での課外活動経験や音楽の習い事（お稽古事）の項目について、回答結果を報告する。

(2) 質問および回答の結果

【基本情報の項目】

1 氏名 2 性別 3 年齢 4 出身地

基本情報として上記4項目の回答を求めた。出身地を尋ねたのは、地域によって音楽科教育の状況が違うがあらうとしたら、どのような違いがあるかという情報を得るためであった。

性別は、男子12名・女子39名であった。出身地は広島県出身者が45名（広島市25名、東広島市4名、廿日市市3名、安芸郡3名、呉市・三原市・尾道市各2名、福山市・三次市・庄原市・北広島町各1名）、島根県出身者3名、鳥取県出身者2名、香川県出身者1名であった。

【音楽能力スキルの自己評価の項目】

①あなたは楽譜を読むことが得意ですか？

(5段階尺度：「5」＝とても得意である、「1」＝全く不得意である)

表1 「楽譜を読むことが得意ですか？」の回答

対象学生	「5」	「4」	「3」	「2」	「1」	平均 (SD)
n = 51	4 (8%)	9 (18%)	9 (18%)	16 (31%)	13 (25%)	2.51 (1.26)

「2」「1」の回答の合計は56%である。楽譜を読むことに困難を感じている学生が半数以上いることがわかる。

②あなたは楽典の知識がありますか？（ここで言う「楽典の知識がある」とは、楽譜の読み方の知識や、音階や和音（コード）などの知識がある、などのことを指します。）

(5段階尺度：「5」＝とても知識がある、「1」＝全く知識はない)

表2 「楽典の知識がありますか？」の回答

対象学生	「5」	「4」	「3」	「2」	「1」	平均 (SD)
n = 51	2 (4%)	12 (24%)	14 (27%)	10 (20%)	13 (25%)	2.61 (1.21)

③あなたは、聴こえてくる音や旋律を楽譜に書くことはできますか？

(5段階尺度：「5」＝とてもよくできる、「1」＝全くできない)

表3 「楽譜に書くことはできますか？」の回答

対象学生	「5」	「4」	「3」	「2」	「1」	平均 (SD)
n = 51	3 (6%)	8 (16%)	3 (6%)	9 (18%)	28 (55%)	2.00 (1.33)

「2」「1」の回答の合計は73%である。聴音の能力に困難を感じている学生が大半であることがわかる。

④あなたは歌うことは得意ですか？

(5段階尺度：「5」＝とても得意である、「1」＝全く不得意である)

表4 「歌うことは得意ですか？」の回答

対象学生	「5」	「4」	「3」	「2」	「1」	平均 (SD)
n = 51	7 (14%)	14 (27%)	13 (25%)	8 (16%)	9 (18%)	3.04 (1.30)

「2」「1」の回答の合計は34%である。小学校教員・保育者にとって子どもに歌唱モデルを自ら示したり、歌唱指導を実践したりすることが将来頻繁に必要なにもかかわらず、歌唱が得意ではないと回答した学生がかなりいることがわかる。

⑤あなたは、鍵盤ハーモニカを演奏することが得意ですか、あるいは、小中高生の頃は得意でしたか？

(5段階尺度：「5」＝とても得意である(であった)、「1」＝全く不得意である)

表5 「鍵盤ハーモニカの演奏は得意ですか？」の回答

対象学生	「5」	「4」	「3」	「2」	「1」	平均 (SD)
n = 51	15 (29%)	13 (25%)	9 (18%)	7 (14%)	7 (14%)	3.43 (1.39)

- ⑥あなたは、リコーダーを演奏することが得意ですか、あるいは、小中高生の頃は得意でしたか？
 (5段階尺度：「5」＝とても得意である(であった), 「1」＝全く不得意である)

表6 「リコーダーの演奏は得意ですか？」の回答

対象学生	「5」	「4」	「3」	「2」	「1」	平均 (SD)
n = 51	5 (10%)	19 (37%)	18 (35%)	6 (12%)	3 (6%)	3.33 (1.00)

- ⑦あなたは、打楽器を演奏することが得意ですか、あるいは、小中高生の頃は得意でしたか？
 (5段階尺度：「5」＝とても得意である(であった), 「1」＝全く不得意である)

表7 「打楽器の演奏は得意ですか？」の回答

対象学生	「5」	「4」	「3」	「2」	「1」	平均 (SD)
n = 51	9 (18%)	12 (24%)	15 (29%)	8 (16%)	7 (14%)	3.16 (1.27)

- ⑧あなたは、中学校か高校で学習した和楽器(琴・篠笛・三味線など)を演奏することが得意でしたか？

(5段階尺度：「5」＝とても得意である(であった), 「1」＝全く不得意である)

表8 「和楽器の演奏は得意ですか？」の回答

対象学生	「5」	「4」	「3」	「2」	「1」	平均 (SD)
n = 51	2 (4%)	9 (18%)	10 (20%)	14 (27%)	16 (31%)	2.35 (1.20)

【小学校・中学校・高校で受けた音楽教育の項目】

- ①小学校では、音楽の授業で1人ずつ歌う歌唱テストがありましたか？

あった 19名 / 51名 (37%) なかった 32名 / 51名 (63%)

この質問をすることによって、学生が小学生時代受けた音楽科授業が歌唱力の育成を重視していたかどうかを知ることができると考えた。1人ずつ歌う歌唱テストを63%の学生が受けていないという事実から、個別での歌唱指導や評価を受けていない可能性が示唆される。

- ②小学校では、どのような音楽の授業をうけてきましたか？ 最も中心的だったと思うものにチェックをしてください。(複数選択可)(()内の数は回答者のチェック数を示す。)

歌唱合唱の学習 (48 / 51) リコーダーの学習 (43 / 51)
 鍵盤ハーモニカの学習 (30 / 51) 合奏の学習 (29 / 51) 音楽を鑑賞する学習 (24 / 51)
 音楽を作る学習 (2 / 51) 楽譜の読み方の学習 (8 / 51)
 音楽に合わせて体を動かす学習 (15 / 51) その他 (0 / 51)

小学校の音楽科授業では、歌唱合唱の学習とリコーダーの学習が多いことがわかる。近年の音楽科教育で推進が図られてきた鑑賞学習は約50%程度で、同じく平成から新しく導入された音楽づくりに関してはとても少ない結果であった。また、楽譜の読み方の学習に力を入れている授業体験

が少ないことも示唆される結果であった。

③中学校では、音楽の授業で1人ずつ歌う歌唱テストがありましたか？

あった 32名 / 51名 (63%) なかった 19名 / 51名 (37%)

中学校では、1人ずつ歌う歌唱テストを63%の学生が受けており、個別での歌唱指導が実践されていること、多くの音楽教師が個々の歌唱力を把握しようとしていることが示唆される。

④中学校では、どのような音楽の授業をうけてきましたか？最も中心的だったと思うものにチェックをしてください。(複数選択可)(()内の数は回答者のチェック数を示す。)

歌唱合唱の学習 (45 / 51) リコーダーの学習 (34 / 51) ギターの学習 (5 / 51)
和楽器の学習 (16 / 51) その他の楽器の学習 (4 / 51) 合奏の学習 (10 / 51)
音楽を鑑賞する学習 (38 / 51) 音楽を創作する学習 (6 / 51) 楽譜の読み方の学習 (12 / 51)
音楽に合わせて体を動かす学習 (5 / 51) その他 (0 / 51)

中学校の音楽科授業では、歌唱合唱の学習が最も多く、次に鑑賞学習、リコーダーの学習が多かった。

⑤高等学校の授業では、音楽を選択しましたか？

選択した 33名 / 51名 (65%) 選択しなかった 18名 / 51名 (35%)

⑥高等学校では、どのような音楽の授業をうけてきましたか？最も中心的だったと思うものにチェックをしてください。(複数選択可)(()内の数は回答者のチェック数を示す。)

歌唱合唱の学習 (28 / 33) リコーダーの学習 (6 / 33) ギターの学習 (18 / 33)
和楽器の学習 (8 / 33) その他の楽器の学習 (7 / 33) 合奏の学習 (13 / 33)
音楽を鑑賞する学習 (27 / 33) 音楽を創作する学習 (0 / 33) 楽譜の読み方の学習 (18 / 33)
音楽に合わせて体を動かす学習 (4 / 33) その他 (0 / 33)

高等学校の音楽科授業では、歌唱合唱の学習と鑑賞の学習が多く行われ、次いでギターの学習と楽譜の読み方の学習であった。

【小中高校での課外活動経験や音楽の習い事（お稽古事）の項目】

①あなたは、音楽の部活動経験がありますか？

はい 17名 / 51名 (33%) いいえ 34名 / 51名 (67%)

②あなたが所属した部活はなんですか？（複数選択可）

合唱（0 / 17） 吹奏楽（13 / 17） 管弦楽（0 / 17） 軽音楽（3 / 17） 邦楽（2 / 17）
その他（2 / 17）

吹奏楽部に所属した経験がある学生は13名と多かった。

④あなたは、音楽の習い事（お稽古事）の経験がありますか？

はい 25名 / 51名（50%） いいえ 26名 / 51名（50%）

⑤あなたが経験した習い事（お稽古事）はなんですか？（複数選択可）

ピアノ（20 / 25） 電子オルガン（4 / 25） バイオリン（0 / 25） 児童合唱団（0 / 25）
その他（1 / 25）

(3) 調査結果の考察

音楽能力スキルの自己評価の項目における質問ごとの結果を、音楽の部活動経験者・音楽の習い事経験者を除いた、それ以外の一般的な学生、つまり音楽科教育がほぼ唯一の音楽学習機会であった学生群20名について表9に平均（SD）で示す。同様の結果を、音楽の部活動経験者および音楽の習い事経験者を合計した学生群31名について表10に平均（SD）で示す。

表9 一般的な学生20名の音楽能力スキルの自己評価の平均（SD）

質問項目	①楽譜を読むこと	②楽典の知識	③楽譜に書くこと	④歌うこと
学生群（n = 20）	1.67（0.64）	1.71（0.76）	1.10（0.29）	2.67（1.32）
質問項目	⑤鍵盤ハーモニカ	⑥リコーダー	⑦打楽器	⑧和楽器
学生群（n = 20）	2.57（1.33）	2.86（1.04）	2.67（1.08）	1.67（0.84）

表10 音楽の部活動・音楽の習い事経験者31名の音楽能力スキルの自己評価の平均（SD）

質問項目	①楽譜を読むこと	②楽典の知識	③楽譜に書くこと	④歌うこと
学生群（n = 31）	3.10（1.25）	3.23（1.05）	2.63（1.40）	3.30（1.22）
質問項目	⑤鍵盤ハーモニカ	⑥リコーダー	⑦打楽器	⑧和楽器
学生群（n = 31）	3.38（1.40）	3.28（1.03）	3.11（1.28）	2.31（1.20）

この結果から、一般的な学生群は①楽譜を読むこと・②楽譜の知識・③楽譜を書くこと・④和楽器の演奏の4項目の平均値が著しく低いことがわかる。特に重大な問題は、一般的な学生が①楽譜を読むこと・②楽譜の知識・③楽譜を書くことがとても不得意だと思っていることである。つまり楽譜を読んだり書いたりすること、楽典の知識があることは、国語で言えば読み書きができること、算数で言えば九九が言えることなどの音楽の基礎的な内容である。

緒方らが指摘したように（緒方他2010）、音楽の基礎的な内容が不十分なままの音楽活動は、か

なり困難なものになる。例えば、自立した音楽活動はほぼ難しい。他にも、ある楽曲を丸暗記しなければ歌唱も演奏もできないという状況や、ある曲を懸命に練習して演奏できるようになったとしてもその練習で学んだことを土台として応用的に他の曲にも援用できるといったことはできないという状況にもなる。つまりこの結果は、音楽学習や音楽練習の停滞や悪循環に陥りやすいことを示唆している。小学校教員・保育者養成における音楽教育に携わる者は、このことを十分に考慮した音楽指導が必要になってくると考えられる。

次に、歌うこと・鍵盤ハーモニカ演奏・リコーダー演奏・打楽器演奏・和楽器の演奏の平均値も問題がないと言える数値ではない。歌うことも、楽器を演奏することも小学校教員・保育者をめざす学生にとっては重要な学ぶべきスキルである。彼らには、子どもたちに良いモデル演奏を示す役割、的確に演奏を評価し改善へと導く役割が求められるようになる。そのためにも演奏技術の向上に向けた音楽教育の改善が必要である。

3 まとめ—これからの小学校教員・保育者養成における音楽教育改善に向けて

今回の質問調査から、①楽譜を読んだり書いたりすることの学習、および楽典の学習が必要である、②歌唱スキルや楽器演奏スキルも高めていく必要がある、という知見を得ることができた。

しかし、音楽教育改善を進めるにあたり、今回の質問調査だけで十分な検討ができるとは考えていない。学生たちの音楽能力そのものを何らかの方法で測定し、それを分析・検討して、音楽教育改善に向けてより有力な情報を入手することが必要である。このことを今後の課題としたい。

【主要引用・参考文献】

- ・緒方満編著（2010）『読譜力という基礎的能力—小・中学校を一貫して育む学力—』教育芸術社
- ・緒方満（2019）「保育者・教員養成系大学における音楽教育実践の課題と展望（1）—比治山大学現代文化学部子ども発達教育学科の「音楽Ⅰ・Ⅱ」の実践より—」『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第5号，pp.48-52
- ・小川昌文（2008）「学校の音楽教師にとって本当に必要な力とは何か—『my music』という概念の導入—」『音楽教育実践ジャーナル』vol.5 no.2，日本音楽教育学会，pp.73-84
- ・山本峻大・森田慎也・三浦雅展（2008）「MIDI ピアノを用いた単音打鍵訓練における読譜及び演奏能力の調査」『日本音響学会研究会資料』MA2008-57，pp.75-78
- ・吉富功修他（2008）「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発（1）—中学校入学時の音楽学力の実態を中心として—」『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』第36号，pp.145-154